

## 精神分析の隘路

——木々高太郎「わが女学生時代の罪」を中心に——

鈴木優作

はじめに

木々高太郎「わが女学生時代の罪」(初出時、「わが女学生時代の犯罪」)は、『寶石』一九四九年三〜二月号、一九五〇年二〜五月号、九月号、十一月号、そして「解決篇」が一九五一年二月号と、三年に亘り断続的に連載された。戸川安宣が指摘するように、中絶をはさむ長期連載であったため、「随所に辻褃の合わない箇所が生じ」「単行本化に際し、タイトルや章立ての改変ばかりでなく、終章近くの一場面を小説の冒頭にもつてくるというような構成の大幅な変更まで行っている」<sup>(1)</sup>。

かように構成上の問題を孕んだ作品ではあるが、他方では中島河太郎や濫澤龍彦の指摘するように「精神分析」というテーマに挑んだ「力作」としての評価もある<sup>(2)</sup>。それでは本作は、探偵小説と精神分析という視座からすれば、どのような特徴を有した作品と言えるであろうか。まずは前史として、近代日本におけるフロイト精神分析の受容、そしてその探偵小説への影響についてごく簡単に触れておきたい。

曾根博義によれば、フロイトの精神分析学や性欲論は、一九〇〇年代には早くも日本の心理学者の一部には知られ、文学者では森鷗外や木下杢太郎がいち早く関心を示していた。やがて上野陽一の心理学研究会と雑誌『心理研究』(一九二二年一月〜一九二五年一〇月)および中村古峽の日本精神医学会と雑誌『変態心理』(一九一七年一〇月〜一九二六年一〇月)により一般的に普及してゆく<sup>(3)</sup>。そして探偵小説界においては、江戸川乱歩は明智小五郎をして「物質的な証拠なんでものは、解釈の仕方でもなんでもなものです。いちばんいい、探偵法は、心理的に人の心の奥底を見抜くことです」<sup>(4)</sup>と言わしめ、長谷川天溪は「その(無意識の・稿者注)研究者は、心理の探偵であり、その結果は、一種の探偵報告である。精神分析学は、心理探偵学とも称すべきもので、探偵小説作家の、まさに考究すべき処女地である」<sup>(5)</sup>と説いた。このように大正末期に探偵小説は「心」への眼差しが収斂するひとつの場となっていた<sup>(6)</sup>と一柳

廣孝は述べている。さらに、乱歩、天溪の上記の作品や論が掲載された〈探偵小説のメッカ〉『新青年』において、一九二八年六月に水上呂理が「精神分析」でデビューし、フロイトの精神分析によつ

て神経症から起こった犯罪が解かれてゆく。

また、昭和四年には春陽堂書店、アルスからフロイト翻訳全集出版が始められ、「フロイト・ブーム」がピークを迎える。

さて、本稿にてまず焦点化したのは、本作において精神分析がいかにか表現されているのかということである。それを知るために、ひとまず梗概を記しておく。

女学生木村りみ子は、同姓同名の木村里美子と同性愛の関係にあった。しかし里美子は、卒業と同時に富田銀二に嫁いでしまう。

りみ子は妊娠が発覚し、その相手は養父の弟で画家の兼雄だという。その子はりみ子の両親が自分達の子として育てることにする。しかし女子大に通うようになってからりみ子には精神病の兆候が見られ、大心池の病院に入院となった。語り手・津村が精神分析を担当するが、捗々しくない。ある日、りみ子の娘久江がさらわれてしまう。

大心池はりみ子を精神分析するが、りみ子は夜に病院を脱出する。そこで大心池は津村にりみ子を探偵するよう命じる。津村はりみ子の実家や富田の身辺、兼雄の郷里などを訪ね、りみ子が女学生時代を過ごした木村邸に行きついたが、そこでは兼雄が死んでいた。

(先の戸川の指摘のように単行本化の際はこの「構成の大幅な変更」がある。この木村邸での兼雄の死の場面が語りの現在として作品冒頭となり、りみ子の精神分析から津村による探偵行為までが、津村が青酸の中毒で意識を失う間に挿入されている・稿者注) 大心池が現場に赴き事件を推理、解決する。死因は絵の具に混ぜてあった青酸の中毒であり、銀二が里美子を殺すため持っていたものを、

里美子が間違えて兼雄に送ってしまったのだ。また、りみ子の妊娠は、当時銀二と肉体の交渉のあった里美子がりみ子とも交渉をもったためであった。そこでりみ子は妊娠の真相に迫る兼雄や銀二から身の危険を感じ、詐病で精神病院に入院したのだ。久江をさらったのは銀二だと確信したりみ子は脱走後に久江を取り戻す。

このように、精神病患者(とされる)りみ子に対し語り手である津村が精神分析を施すのだが、それが思うように進まず、効果を上げない。それは、被分析者のりみ子が分析されることに「抵抗」(この「抵抗」という概念については後に触れる)しているためである。探偵小説における精神分析という視座からして本作が特徴的なのは、それが推理の道具でありながら、有効でない道具として描かれているという点である。そして、多くの探偵小説において精神分析が用いられる際、探偵なり探偵役の人物が、理論を当てはめて一方的に解釈を下してゆくのに対し、本作では専門の精神医学者が、フロイトが精神分析をする際に用いた自由連想法によって精神分析を行う。つまり、分析主体の属性と実施方法が異なる。前者が理論的精神分析であるといつてよいならば、後者はそれに対し臨床的精神分析であるといえるだろう。横井司も本作について「フロイトの精神分析学を取り入れつつ、その理論を応用するさいの臨床現場における問題点を扱っている」と指摘しているが、本作における臨床的精神分析とそれによって露呈した精神分析の限界について考察することで、新たに生まれる探偵行為の方向性を見出したい。

一 「網膜脈視症」「就眠儀式」の中の精神分析」においては、

木々が「精神分析をとり扱った」と言及する三作品の内、戦前の二作を挙げ、精神分析が有効な推理アイテムであり、フロイトに絶対的權威が付与されていることを確認する。そして二「わが女学生時代の罪」の中の「精神分析」においては、本作における精神分析が前二作とは異なり無効化されていることを確認する。さらに三「臨床的精神分析の受容」においては、それらを国内の臨床的精神分析の受容という観点から論じる。最後に四「探偵」する「私」においては、精神分析の無効性が齎した探偵行為の変容について考察したい。

## 一 「網膜脈視症」「就眠儀式」の中の精神分析

精神分析をモチーフとした木々高太郎の作品は、本作のみではない。「わが女学生時代の罪」発表時点では、処女作「網膜脈視症」(『新青年』一九三四年一月)および「就眠儀式」(『ぶろふい』一九三五年六月)が先行作品としてある。本作と合わせた三作について、木々は本作(『解決篇』冒頭の「作者の言葉」)の中で次のように言及している。

これで精神分析をとり扱った作者のものは「網膜脈視症」「就眠儀式」とこの作品の三つとなるが、そのいづれも、精神分析学者達の定説を超へたオリジナルな考へ方が入つてゐる。<sup>13)</sup>

「そのいづれも、精神分析学者達の定説を超へたオリジナルな考へ方が入つてゐる」とあるように、三作それぞれに精神分析に対する何らかの見解を含ませているのであろう。それは「網膜脈視症」

においては、「精神分析と条件反射の融合」の「実験」であると飯塚数人は述べている。また、「就眠儀式」においては、「経済上の問題」の「エディプス観念群」への影響が患者に見出されている。しかし、三作をつなぐモチーフとして、精神分析に対してオリジナルな考えを提起する、という枠自体は全く変わらない。

ここで問題としたいのは、これら三作における精神分析の地位が、変化してゆくということである。すなわち、作品を追うごとにその地位が徐々に揺らいでいくのである。そのことを、一作ごとに確認していこう。ただし三作目の「わが女学生時代の罪」については、本稿の主たる分析対象であるため、次章で一章を割き、より詳らかに検討する。

まず、「網膜脈視症」である。この作は、父親が上海から帰ってくると、急に火が見えると騒いだ男の子松村真一を、大胆池が、何か神経症の原因と網膜脈視とが結合しているとして、精神分析により追及する物語である。ここでは、精神分析に万能的なイメージが与えられており、そのアイコンとしてフロイトが登場する。

「先生、神経症と言ふのは面白いものですな。精神病学では最も理論的の部門ですね」

「最もとは言へぬが、フロイトが出てから理論的になつた。精神分析と言ふと、皆が厭がる。あれは精神分析の理論を、神経症だけでなく、正常人にも及ぼさうとするから、厭がられるのだが、実はフロイト自身にも、さうした癖というか、好みと言ふか、あるのだね。然し兎に角、精神病学を、病理学と解剖学

の桎梏から脱せしめて、生理学と合流させたフロイドの大功績は無視してはならぬ』

『然し、岡村君、子供一人を手頼りに、此れだけの分析解釈の出来る腕を持つてゐる者は、世界に四人しかゐらない筈だ。一人はフロイド先生だ。フロイド門下に、オットー・ランクと言ふのがゐる。あれだ。それから、此の大胆池だ。もう一人、それは君の正に享有すべき名誉だ。その名誉を私が守つてあげる。』

〔後略〕

そして、万能である精神分析のアイコンとしてのフロイト、その弟子である大胆池、さらにその弟子岡村も「腕」や「名声」、「名誉」を保証されることとなる。一方で、精神分析による推理から捕えられた犯人は、次のように述べている。

『どうも子供つてやつ、六年もたつてから証人になりやがるんで、始末のわるいものですねえ。それに精神分析とやら言ふ術は、こはいもんですねえ』

ここには精神分析を知る者と知らぬ者の間の格差が表れている。前者が勝者としての探偵であり、後者が敗者としての犯罪者である。この図式は、水上呂理や乱歩作品でおなじみの、精神分析という知の所有によって決定づけられる探偵と犯罪者の優劣関係である。

次に、「就眠儀式」である。この作は、就眠儀式に囚われた水尾子に対し、大胆池や学生の川本が精神分析を試み、これが水尾子の家庭の経済問題に起因するものであることを探つてゆく物語である。

ここでは、次のように大胆池がフロイトの下で学んでいたことも明かされる。やはり、フロイトとの連続性が大胆池のアイデンティティを保証しているのである。

〔前略〕僕は、Psychische Menstruation（精神的月経）と言ふやうな仮定すらして、と言ふ大胆な論文を書いたこともあるよ。フロイドのところにあつた頃のことだつた。——ウイーンあの初夏のことだつた——もう二十年も前になるが……』

そして、「それはやはり精神分析療法を施したら効果あるものと思ふね」という大胆池の勧めで学生の川本が水尾子を分析する。

しかし、川本の分析は功を奏しない。そこで大胆池が水尾子にくつかの質問をし、分析を加えることで物語が展開する。このように「網膜脈視症」では精神分析が万能ではないのだが、川本の精神分析の失敗が却つて大胆池の精神分析を呼び込み引き立てることになっているため、あくまでも大胆池による精神分析は絶対化されたままである。「網膜脈視症」「就眠儀式」においては、精神分析やそのアイコンとしてのフロイトが、直接的にせよ間接的にせよ推理アイテムとして有効性や權威を保証されて物語を解決へと導いているのである。

小松史生子は、「就眠儀式」について「フロイト精神分析の言説を露骨にレトリックに流し込むような作風」と述べ、そこから「一歩抜け出し、永遠の謎（ミステリー）」として妄想される（少女「ころ」について掘り下げていく傾向）のある作品として「折蘆」（『報知新聞』一九三七年一〜六月）を評価している。方向性こそ違えど、

「わが女学生時代の罪」もまた、そのような「流し込み」から脱していくテキストであると言えよう。

## 二 「わが女学生時代の罪」の中の精神分析

さて、以上二作の延長線上に「わが女学生時代の罪」が位置するのであるが、本作においては、精神分析の困難さが津村によつて至るところで語られている。津村はりみ子を精神分析するのだが、一向にそれが進まない。

夢の分析をした日、私は患者木村りみ子の二つの夢を執拗に考へてゐた。どうしても判らない。——私には何の想像力もないのであらうか。こんな特異な、そしてはつきりしてゐる夢を得てゐるのに、フロイドの公式をいくら適応してみようとしてみても、全く手懸りが無い——少くとも私には発見することが出来ないのである。

精神分析と言ふことを、フロイドがはじめて以来、その手法についてはいろいろ研究せられてゐる。然し、私共がその原著をよみ、その学理に通じただけで、さて分析に従つてみると、困難百出で、たうとう失敗して了ふという例がいくつかあつた。やがて、私共は、本にも書いてない、そして学理のうちにも入つてゐない一つの大切な原理をさとるに到つた。

その原理とは何か。

極めて簡単なものであつた。それは、一つのテーゼとして言

ひ表はしてみると「こちらに判つてゐないものは、決して判らない」と言ふことになる。

ここでは、フロイトや精神分析の絶対的權威性、有効性は失われている。

また、津村の精神分析が進まぬ中、大心池は津村に「探偵」をするよう命じ、大心池自身がりみ子の精神分析に当たる。この展開は「就眠儀式」と同型であり、「就眠儀式」における川本が「わが女学生時代の罪」における津村と同じ役割——大心池の精神分析の引き立て役——を果たしているように見える。しかし実際は、大心池の精神分析における問いかげの答えは、りみ子の父親から聞いた情報により既に大心池の手中にある。大心池の狙いは精神分析にあるのではなく、問いの後にある、陽動作戦である。

大心池はりみ子に、三つの質問をする。一点は、木村兼雄の描いたりみ子の肖像画が、よく自分を描けているように思うか。「むしろ、あなたの嫌ひなやうに出来て了つたのではないのですか」。二点目は、その絵が、その後どうなったか知つてゐるか。「木村兼雄画伯がはじめてかいたあなたのお父さんの肖像はどこへ行つたか判らず、それを複写した肖像を、あなたのお父さんに売りつけたのだと想像なさいませんか」。三点目は、自分の娘である久江を「ちつとも可愛いと思ひませんか」。このように、問ひ方自体が誘導尋問らしさを帯びてすらいる。そして精神分析を終えた大心池は、一旦立ち去り「突然あわてたやうに」部屋に再び入つて来る。そして、りみ子に「娘の久江が、「何者の手とも知れずどこかへつれ去られ」たこと

を伝える。りみ子は、「つれ出した」のは里美子だと断言する。このように、久江を連れ去った者が誰であるかということ、りみ子に推測させるまでの迂回路として精神分析を用いている。このことについては、りみ子も「みんな御存知でありながら、遠まはしに精神分析をなさつてあつしやるの、それは残酷なことだと御考へになれませんか？」と難じている。

このように、精神分析をモチーフとしそれぞれに「オリジナルな考へ」を孕んだ三作であるが、精神分析への信仰は徐々に薄らぎ、「わが女学生時代の罪」に至つては解決に至る有効な推理アイテムとなりえていないのである。正確に言えば、有効な推理アイテムとなりえていないことが積極的に描かれているのである。

### 三 臨床的精神分析の受容

それでは、このようなフロイトや精神分析の表象の変化は何に起因するのであろうか。この問題に関しては、近代日本における精神分析受容の歴史に拠りつつ考察していきたい。

まず、精神分析の受容史においては理論から実践すなわち臨床へという道程があり、それが探偵小説における精神分析の導入においても見出せる、ということに着目したい。そして重要なのは、自由連想法による臨床化の際に生じた「抵抗」という概念が、精神分析の障害として発見されたことである。

佐藤達哉は精神分析の体系を、個人の心理過程（発達過程）を説明するという意味での心理学的側面、神経症などの精神異常を説明

するという意味での精神病理学的側面、そして神経症などの治療をめざす精神療法的側面、という三つの側面に分類している。そして、大正期に「心理研究」や「変態心理」などにより紹介された精神分析は、「精神療法との関連づけも十分とは言え」ず、「心理学的な問題との関連で語ら」れ、「新しい興味深い考え方」として紹介されていた、という。先の三分類で言えば、一つ目の心理学側面がこの時点では強く、治療ではなく「考え方」すなわち理論として受容されたのである<sup>15)</sup>。

その後、「日本に精神医学としての精神分析をもたらした」のは丸井清泰であるとされるが、丸井の師であるマイヤーは精神分析的療法を実際に行つたわけではなく、丸井がマイヤーも含めた他の誰かに精神分析の訓練を受けた形跡もない。「丸井が患者に対して行つていたことは、問診に近い形のものであり、その回答を丸井が精神分析的な観点から解釈して説明するというものであり、丸井は患者の転移や抵抗ということに、ほとんど関心をもっていなかった」という。その丸井の弟子、古澤平作が一九三三年に「古澤精神分析学治療所」を開設する。古澤は自由連想法を根本に置き精神分析療法を中心とした初めての精神科医である。そして古澤は一九五〇年に精神分析研究会を設立、これを母体とした日本精神分析学会を一九五五年に創立し会長となる。このように「精神医学を中心に精神分析の受容が進んだ」のは戦後である<sup>16)</sup>。つまり、いわゆる「フロイト・ブーム」は理論としての精神分析の受容であり、それが分類の三点目のように臨床において用いられるようになったのは、古

澤の開院する昭和九年あたりから、戦後にかけてということになる。

探偵小説における精神分析の導入も、その軌道上にあると言える。水上呂理「精神分析」などに顕著なように、探偵小説の推理アイテムとして精神分析が用いられる際には、「考え方」としてであり、対象の観察から分析、解釈へ一方的とも言える「推理」を成立させている。そのような方向性は、明智小五郎の「物質的な証拠なんでものは、解釈の仕方でも何でもなるものですよ」という、解釈に偏向した言説に凝縮され表れているだろう。しかし、精神分析が臨床的に導入される際、その前提となるのが自由連想法である。この自由連想法から必然的に生じるのが、患者の抵抗という問題である。自由連想法とは、「患者に総て後からの意識的考慮を放棄して、心を落着けて自発的に（その意なくして）想起されて来るものを追求させる（彼の意識の表面から離れて探らせる）」と云ふ方法<sup>19</sup>である。そして「精神分析学治療の技法的基礎は自由連想法であり、「頭に浮かんだことをそのまま、いっさいの批判を加えずに連想する」ことは、自由連想法実施の鉄則であり、もしこの方法が守れない場合には、分析に対する抵抗現象として患者に説明解釈される<sup>20</sup>」とルール化され、分析の障害として認識されている。

「わが女学生時代の罪」においては、自由連想法がりみ子に用いられている。津村はりみ子に、精神分析を始める際に語りかける。「よろしい。静かに、思ひ出すまゝを述べて御覧なさい。苦痛のお話も遠慮なく思ひ浮べて御らんなさい。苦痛の時は手助けをしてあげるから」

そして精神分析中は、地の文がりみ子の一人語りとなり、行間の余白が増し、りみ子が自由に思いつくまゝを述べていることが文体においても表現されている。つまり、自由連想法による語りであることが強調されているのである。

しかし、「解決篇」でりみ子が告白するのは、自らの精神病は、身に危機を感じ精神病院へ身を隠すための「詐病」だったということである。りみ子は「病院での精神分析の診察には、何か申上げなければならず、而も嘘を申上げること」はできないと自覚していた。そこで、「自分で判るところは一切省略して丁ひ、たゞ自分では何とも解釈の出来ない部分だけを」言ったのである。これはまさに、「頭に浮かんだことをそのまま、いっさいの批判を加えずに連想する」自由連想法による精神分析を妨げる「抵抗」現象である。津村がりみ子を精神分析し、「どうも面白くない。こちらでめざしてゐるものが出ない——」と悩む、その章の題が「抵抗」（初出時。初刊時は「レジスタンス」）であることから、「抵抗」の作中における重要性が伺える。

大心池はりみ子の精神分析について、「君の今まで骨折つた、分析の結果は大切で、あとで必ず役立ちますと思ふ」と留保した上で、「あれは精神分析ではつきとめられない」とし、「精神分析を越えるものが、あの人の心のうちにある」と言う。津村はそれを聞き、次のように思う。

それこそ、よく判らない言葉であつた。人の心のうちのかくされたものを探り出すのに、唯一絶対の武器とまで信じてゐる

分析手法をそして、そのとおり教授からも教へられて、やつて来てゐる分析手法を越えるものが、——心のうちにあると聞くのは、私には不思議であつた。

ここで精神分析が無効化されながらも、それが有効でないことを見抜く大心池の慧眼が強調されているわけである。しかし、実際にはりみ子の告白によれば、りみ子の詐病は「精神分析の本などをよんで」いたために思いついたもので、「精神分析を越えるもの」があるなどと言ひ難い。従つて、大心池は、精神分析の有効でないことを指摘することで逆説的に証明しているはずの自らの洞察力をも否定されるのである。りみ子は結末で「恐らくこの時（入院の際・稿者注）、はじめから先生御自身で私を診て下すつたならば、直ちに見抜かれて了つたのでございませう」と大心池を慰撫するが、「網膜脈視症」「就眠儀式」で万能性を發揮していた大心池の雄姿は、もはや「恐らく……でせう」という推測の中にしか存在しない。

このように、臨床的精神分析を探偵小説における推理アイテムとした場合、探偵の一方的な解釈ではすまない。自由連想法が前提としてあるため、当然被験者の問題、すなわち「抵抗」の問題が浮上する。患者が治療を望んだ上で、患者との協力関係に基づき「抵抗」を排し、「精神生活」にある抑圧されたものを意識的に認識にまで持ち来たさうとする<sup>(22)</sup>のが精神分析である。その精神分析者と被験者の関係が探偵小説内に持ち込まれ、探偵と参考人の関係に重ねられた時、協力関係が保証されないのは自明である<sup>(23)</sup>。かくして、探偵小説における精神分析は他ならぬ精神分析によつてその隘路を

指し示されたのである。

以上、本章においては臨床的精神分析の国内受容史を視座に、探偵小説と精神分析の相関を「わが女学生時代の罪」を中心として論じてきた。大正期から昭和前期にかけてその理論面を主として受容されたフロイトの精神分析は、探偵小説においても心理解釈による推理アイテムとして導入された。やがて古澤平作により一九三三年あたりから臨床面で実用化された精神分析は、戦後に至るまでに治療をめざす精神医学として受容されてゆく。木々の精神分析をモチーフとした三作は、「古澤精神分析学治療所」開設の年近くに始まり、戦後にかけての臨床化の歴史と歩調を合わせるように、問題点を明確化してゆく。すなわち、「わが女学生時代の罪」における、自由連想法と「抵抗」の問題である。

探偵小説において臨床的精神分析が導入される際、原理的に精神分析は有効性を保証されなくなつてしまふ。それはやもすると万能化されがちであつた精神分析的推理から一方的な心理解釈という推理の安全性を奪ひ、フロイトを玉座から降ろし、フロイト精神分析パラダイムを相対化する。このような問題提起が本作には見いだせると言えよう。

#### 四 「探偵」する「私」

さて、これまで論じてきたように、臨床的精神分析の導入が推理アイテムとしての精神分析を無効化しているわけだが、それが同時に津村の素朴な、いわゆる〈足で稼ぐ〉タイプの探偵行為を活性化



させていることは看過できない。

精神分析が思うように進まない津村は、女学校の先生であった藤村や工場医の明石から同性愛の実態について話を聞く。そして、「経験」や「実際の調査」の重みを知り、「偉い人達の理論」に圧倒されている自らを自覚する。そして、フロイトの「公式」が通用しないばかりか、津村はそうした「偉い人の理論」から離れて「経験」や「實際」性を重視するようになる。

そこで、私は、同性愛についての、実際の調査をして置かないと、どうしてもあれ以上に分析をつけ、分析のうちから何かを引き出すことはたうてい出来ないかと考へ、思ひついて藤村章一郎君を訪問することにしたわけである。

私は、経験からものを言つてゐる明石君に対して、頭を下げる気持になつた。単なる学問の理論などから考へてゐるのではなく、この人はもう、理論を實際のことから批判するやうになつてゐるのだ。

それに対して、私はどうだらう。毎日患者をみ、その実際に触れてゐながら、ともすれば、偉い人達の理論に圧倒されて、その真実の実際の力を忘れやすい傾向を自分でよく自覚する。

「精神分析」は「単なる学問の理論」「偉い人達の理論」として津村の懐疑の対象となり、それが対照的な推理方法である「実際の調査」「経験」の重視へと反証的に導いている。

また、時系列上はこれより前になるが、津村はクラフト・エビン

グの同性愛論を巡り大心池と論争している。津村は、大心池の支持するクラフト・エビングの同性愛論には「自家撞着」がある、として「納得が出来なかつた」。「偉い人達の理論」とはこのことを指しているのであらう。このように既存の精神分析的解釈（フロイトのみでなく、広義の）では納得ができぬことが、津村をして藤村や明石への聞き込みへと向かわしめるのだが、この序盤の物語展開からは、精神分析から離れることが（足で稼ぐ）ような探偵行為の端緒となつていくことが分かる。

そして、竹内瑞穂によれば、クラフト・エビング『変態性欲心理』（黒沢良臣訳、大日本文明協会、一九一四年九月）は、「原著者（当時の精神病学の第一人者・稿者注）と出版元（会員数が五千人を超えていたともい）う「啓蒙的学術団体」・稿者注）の権威性を背景としながら、以後日本の「変態性欲」言説のアウトラインを決定づけ」、「言わばクラフト・エビング・パラダイムともいえるものを形成してゆくこととなる」という。広義の精神分析的言説における既存パラダイムへの異議申し立てを津村がしていると解釈すれば、それはこの序盤の論争の後に本格的に展開されるフロイト精神分析パラダイムの相対化の伏線として考えられよう。

本筋に戻ると、津村は精神分析が進まぬ中、大心池に休暇を取り「探偵」になるよう命じられる。ここから津村は、以下のように情報を文字通り（足で稼ぐ）。その上、その使命を喜々としてこなしてゆく。

まだつきとめも何もしないのに、もう私の心のうちには、自

分の探偵眼に自分で満足する感じが湧き、探偵と言ふもの、面白味はこゝにあるのか、自分で推理し、自分でつきとめてゆくと言ふ、この手つきをとることが、案外人間に一種のスリルと喜びとを与へるものだなあ——と感慨にうたれながら、その銀行に入り窓口をたづねた。

私は一寸たちくとなつたが、ここで探偵学とも云ふべきものの、第二章を知つた、名刺入れを探して、自分の名刺を物色したが、幸ひに「警視庁囑託」と刷り込んであるのを三枚ばかりもつてゐた。

私はそこを辞去して、すぐに地下鉄を利用して、世田ヶ谷の富田氏自宅に向向いた。もう時間は、正午に近く、少し訪問には気がひけたが、早い方がよいと言ふ、探偵学第一法則に従つたわけである。

このように、滞つた精神分析をよそに、津村は「探偵」としていわばゲーム感覚で実地捜査をし、「面白味」を見出している。さきほどのように「経験」や「実際の調査」の重みを知つた津村が、「探偵」になることで、より本格的に実理性、経験主義を身に付けてゆく。

ここで重要なのは、津村が語り手であり、「私」という一人称だということである。一般的に、一人称小説では読み手が「私」の視点や感覚を通じて物語内の世界を経験すると言へるならば、本作で

は「私」津村の視点や感覚が読み手を導くのである。それならば、津村の抱く空理空論への不満や精神分析への懐疑、そこから生じた〈足で稼ぐ〉探偵行為への志向は、語りのレベルにおいて読み手に訴求されていると言えないだろうか。

このように、本作には物語展開における、臨床的精神分析の導入によるフロイト精神分析パラダイムの相対化が図られ、他方で「私」の語りを通してその相対化があり、反証的に〈足で稼ぐ〉「探偵」の喜びへと読者を誘惑しているのである。精神分析の隘路の向う側には、実に素朴な〈足で稼ぐ〉探偵行為の世界が広がっていたのである。

### おわりに

木々高太郎「わが女学生時代の罪」は、臨床的精神分析を導入し、自由連想法における「抵抗」を前景化することで、推理アイテムとしての精神分析の無効化を図つた。このことは、一方的な精神分析的解釈による推理にみられるような、理論による解釈に偏向したフロイト精神分析パラダイムの相対化として解釈できる。また、精神分析の無効化が〈足で稼ぐ〉探偵行為を招来し、それはさらに「私」の語りによつて「面白味」「喜び」として読者に訴求されている。

本稿では「わが女学生時代の罪」を中心に、本人が当時言及した三作における精神分析の表象について考察してきたが、今後はより広範に木々文学総体における精神分析の表象を俯瞰することが課題となるろう。

注1

- 1 戸川安宣「編集後記」『日本探偵小説全集7 木々高太郎集』一九八五年五月。ここで言及されている「単行本」とは、『日本探偵小説全集 わが女学生時代の罪』春陽堂書店、一九五三年一月。
- 2 中島河太郎は「解説」『日本探偵小説全集 わが女学生時代の罪』(春陽堂書店、一九五三年一月)において「精神分析と正面から四つに組んだ長編小説として稀有のもの」と述べ、瀧澤龍彦は「解説」『昭和国民文学全集 九 小栗虫太郎・木々高太郎集』(筑摩書房、一九七八年五月増補新版)において「高太郎の若年よりの関心事であった精神分析学を主要なテーマとし、これと四つに組んだ長編力作」と評価している。
- 3 曾根博義「精神分析の紹介」新青年研究会編『新青年読本 全一卷』昭和グラフィティ」作品社、一九八八年二月。なお、曾根のフロイト受容に関する研究としては「フロイト受容の地層—大正期の「無意識」—」(遼河)一九八六年三月「フロイト受容の地層(続)—大正から昭和へ」(同七月)「フロイト受容の地層(三)—川端康成から伊藤整へ」(同十二月)を第一に挙げなくてはならない。しかし、ここでは簡にして要を得た論として上記の「精神分析の紹介」に依った。
- 4 江戸川乱歩「D坂の殺人事件」『新青年』一九二五年一月。ただし、同作における心理的な探偵法に関しては、作中で明智小五郎がミユンスターベルヒにも言及している。
- 5 長谷川天溪「探偵小説の将来」『新青年』一九二七年八月
- 6 一柳廣孝「心理学・精神分析と乱歩ミステリー」『江戸川乱歩と大衆の二十世紀』至文堂、二〇〇四年八月
- 7 谷口基「愛格探偵小説入門」岩波書店、二〇一三年九月
- 8 「フロイト精神分析大系」アルス、一九二九年二月、および「フロイト精神分析学全集」春陽堂書店、一九二九年二月、
- 9 一柳廣孝「拡散する夢—海のほとり」を中心に「人文科学論集」一九一九年七月
- 10 初出では「解決篇」以前、富田銀二は「宗田」銀二とされていた。後の初刊以降では「富田」銀二として統一が図られているため、本稿でも「富田」銀二で統一する。
- 11 横井司「日本現代文学大事典 作品篇」明治書院、一九九四年六月
- 12 「作者の言葉」『宝石』一九五一年二月
- 13 飯塚数人「木々高太郎論—群像」二〇一二年二月
- 14 小松史生子「妄想される(女)ころ」竹内瑞穂+「メタモ研究会」編『変態』二十面相—もうひとつの近代日本精神史』六花出版、二〇一六年九月
- 15 佐藤達哉「日本における心理学の受容と展開」北大路書房、二〇〇二年九月
- 16 古澤平作は天心池と共通点が多数あり、天心池のモデルとして考えることもできる。  
古澤平作(一八九七—一九六八)は日本における「臨床的精神分析の基礎をつくった精神分析学者」であり、「ウィーン精神分析研究室に留学」中、「フロイトFreud」と出会い、『罪悪感の2種』なる独語の論文を提出し「アジャセ(阿闍世・コンプレックス)」を唱えている。「帰国後、1934(昭和9)年(この年については注17を参照されたい。稿者注)から1968(昭和43)年に没するまで、東京で戦前、戦後にわたるわが国ただ一人の精神分析医として開業。…古澤はウィーン留学を通して、臨床精神療法としての精神分析、とくに自由連想法の意義をわが国の学会に認識させ」た(『心理臨床大事典』培風館、二〇〇三年四月、改版。フロイトの下で論文を書き上げ独自の説を唱え、一九三三年あたりより日本において精神分析医として稀有な存在であり続け、自由連想法を治療に取り入れた、という点で天心池と重なる)。また、精神医学者古澤と生理学者林謙(木々高太郎)には二作の共著がある(教材社編集部編『愛情の思索』教材社、一九四〇年二月、および三笠書房編『学生教養講座』三笠書房、一九四〇年二月)。医学・衛生の立場について、古澤は精神医学、林は生理学と、それぞれ自らの専門的立場で一つの章を担当している。どこまで親しい関係であるかは明らかでないが、これら共著の存在から、多少の認識程度はあったと想像される。両書が一九四〇年一月という同時期であることから、この時期に何がしかの接触があった可能性も考えられる。

- 17 前掲『心理臨床大事典』のように一九三四年とする資料もあるが、木浩之、安齊順子「草創期における日本の精神分析」(『精神分析研究』二〇〇四年二月)のように一九三三年とする説もある。この揺れについては、『精神分析』一九三三年一月号に古澤の「精神分析学診療所」の広告及び大槻憲二がその診療所を訪れる「探訪 古沢博士の診療所」なる記事があることから、一九三三年の方が正確であろう。よって拙稿では一九三三年とした。また、この探訪記事がこうした些末な脱線の情報の提供にとどまらないのは、「博士(古沢・稿者注)は記者(大槻・稿者注)に訊問の余地を与へずに、完全に自由連想に終始させてしまった」(博士は記者の内に、精神分析学への社会的抵抗を仮想して居たために正攻法をとつたのかも知れない」と、「自由連想」「抵抗」という語を比喩的に用いていることである。この文は、これらの語が当時の精神分析におけるトピックとしてどれほど広く浸透していたかを物語っているであろう。
- 18 注15に同じ
- 19 大槻憲二訳『フロイト精神分析学全集』第一〇巻、春陽堂書店、一九三三年四月
- 20 現代の精神分析における「抵抗」の概念は、「無意識に作用する」抵抗を指す(『精神分析事典』岩崎学術出版社、二〇〇二年三月)が、本稿ではあくまでも同時代的解釈として、注21における古澤の論にあるような、意識的な「抵抗」をも「抵抗」として捉える。
- 21 古澤平作『精神分析学理解のために』日吉病院精神分析学研究室出版部、一九五八年五月
- 22 注19に同じ。
- 23 ここで想起されるのが江戸川乱歩「心理試験」(『新青年』一九二五年二月)である。この作における心理試験では、自由連想法とやや似た形で、言葉の連想を逆手にとって推理がなされる。しかし、この心理試験は作中、作外(江戸川乱歩「あの作」の作(楽屋断)(『自作自註』一九二九年七月)、同「後記」『柘榴其の他』(雄鶏社、一九四六年九月)、同「解説」『探偵小説名作全集1』(河出書房、一九五六年七月))で言及さ

れているように、ミュンスターベルヒ『心理学と犯罪』を下敷きにして  
いる。本稿ではフロイトの精神分析による自由連想法に焦点化している  
ため、特に本文では言及しない。

24 竹内瑞穂『変態』という文化——近代日本の「小さな革命」ひつじ  
書房、二〇一四年三月

25 (足で稼ぐ)探偵役といえ、松本清張作品にしばしば登場することが  
思い出されよう。清張作品には「古典的な探偵小説に見られるような、  
万能で天才的な能力を発揮する主人公も登場」せず「主人公の多くは、  
うだつのあがない市民だったり出世コースから外れた刑事だったり」  
し、「特権的な場所から事件を解くのではなく、市民・庶民的な生活の次  
元から、地道に真相が探られて行く」(『松本清張事典 増補版』勉誠出  
版、二〇〇八年五月)。木々が『三田文学』編集長時代に当時無名であつ  
た松本清張に小説執筆を慫慂し、それが芥川受賞作「或る『小倉日記』  
伝」へと結実する(岩崎正吾「日本ミステリー史における木々高太郎の  
役割」『松本清張と木々高太郎』山梨県立文学館、二〇〇二年九月)とい  
う事実もあるように、木々清張というリンクは存在する。本作内の  
(足で稼ぐ)探偵の萌芽はそのリンクの一部なのかもしれない。「古典的  
タイプ」である大心池と、のちの清張作品にみられるような(足で稼  
ぐ)タイプの津村の同居する本作は、探偵スタイルの変容の転換期にあ  
るようで、興味深い。しかしこの比喩的状况に関しては、なお多くの論  
証が必要であろうから、ここでは注の一つに留める。

※「わが女学生時代の罪」の引用は、初刊の『日本探偵小説全集 わが女学生  
時代の罪』(春陽堂書店、一九五三年一月)を底本とした。

※引用中の傍線は全て稿者による。なお、旧字体は新字体に改め、ルビは適  
宜省略した。

(すずき・ゆうさく 大学院博士後期課程在学)